

## 20) 胆嚢癌術後の肺塞栓症に対し ECMO 補助後、塞栓除去術を施行した1例

中山 卓・渡辺 健寛  
 名村 理・菅原 正明  
 斉藤 憲・林 純一  
 江口 昭治 (新潟大学第二外科)

症例は61歳、女性。胆嚢癌手術後5日目、急に subshock 及び低酸素血症となり、精査にて肺塞栓症と診断された。呼吸状態が悪化し、また著明な LOS であったため V-A ECMO を導入した。その後も保存的治療に反応なく、ECMO 開始後4日目に人工心肺下にて塞栓除去術を行い、術後4日目に ECMO より離脱可能であった。その後膿胸、創部感染等出現し、管理に難渋したが、胆嚢癌手術後約5ヶ月目に退院した。

本例は早期に ECMO を導入し、手術までの循環・呼吸を維持したこと、また術後の高ビリルビン血症に対する吸着療法等の積極的治療により、良い結果が得られたものと思われた。

## 21) 手術室搬送前に血圧低下をきたした為 ICU で Aortic Occlusion Balloon を挿入し救命された腹部大動脈瘤破裂の2手術例

平原 浩幸・山崎 芳彦  
 金沢 宏・上野 光夫 (新潟市民病院)  
 青木英一郎 (心臓血管外科)  
 高橋 善樹・八木 伸夫 (新潟大学第二外科)

腹部大動脈瘤破裂では、手術を準備している間に出血性ショックとなり、手術に至らない症例も多い。手術準備のため ICU で待機中に血圧低下をきたし、左腋窩動脈より Fogarty Aortic Occlusion Balloon Catheter を挿入し、血圧を維持しながら手術に向かい救命された2症例を報告する。Balloon の拡張量は血圧が維持できる最少量とし、末梢側に少しでも血液が流れるように配慮した。Balloon による occlusion time は症例1は約 45 min、症例2は約 75 min であり、術後非乏尿性の急性腎不全になったが、透析せずに腎機能回復し元気に退院できた。

## 22) 三尖弁位の Stuck valve に対し右開胸により再弁置換した1例

男澤 弘・中沢 聡  
 八木 伸夫・保坂 淳  
 小熊 文昭・入沢 敬夫 (立川総合病院)  
 春谷 重孝 (循環器センター)  
 (心臓血管外科)

49歳女性。Epstein Anomaly の診断で29歳時に ASD

直接閉鎖術、48歳時に Carbomedics 弁による三尖弁置換術を施行された。今回、外来経過観察中に乏尿、肝腫大が出現して入院、X線透視で機械弁の stuck を確認した。ウロキナーゼ投与で一時的に弁可動性の改善を認めたが、再び stuck し再弁置換術を施行した。手術は右開胸で右房に到達、完全体外循環とし心拍動下に右房切開、生体弁を用い再弁置換した。視野は良好で手術時間は3時間15分、術後は順調に経過した。Carbomedics 弁は hinge に Wash Out 機構を有するが、その hinge に形成された血栓が stuck の原因であった。

## 23) 組織所見からみた当院における急性虫垂炎手術症例の検討

平野謙一郎・関矢 忠愛  
 斉藤 六温・吉田 正弘 (刈羽郡総合病院)  
 杉本不二雄 (外科)

当院における虫垂切除症例に対し組織学的炎症程度による分析とその中の炎症軽度例を術前に手術適応から除外する鑑別点の有無についての検討をおこなった。1994年4月1日から1996年8月31日までに当院における虫垂切除及び組織検索提出例103例を対象とした。組織学的炎症程度の内訳は、103例中 normal:19例(18.4%)、catarrhal:2例(2.0%)、phlegmonous:68例(66.0%)、gangrenous:14例(13.6%)だった。術前所見では白血球数と CRP が phlegmonous 以上の群で有意に高値だった。また、上腹部痛が初発症状であった症例も phlegmonous 以上の群で有意に多数だった。一方、体温、腹膜刺激症状の有無については両群間で有意差は認められず、保存的治療も可能であったと推定された20%の症例を術前に診断することは困難であると思われた。しかし組織学的に normal な虫垂は臨床的にも normal といえるのかどうかは今後の検討課題といえる。

## 24) がん検診における全大腸内視鏡検査の成績

三浦 宏二 (がん検診クリニック)  
 (三浦外科)

1) 人間ドック被験者、2) 便潜血陽性者、3) 便通異常者(血便を除く)、計455例(平均年齢52.5歳)に行った TCF の成績を報告する。

腫瘍性病変は、腺腫142例(31.6%)、癌11例(2.4%)、carcinoid 2例(0.4%)、平滑筋腫2例(0.4%)であり、癌の発見率は便潜血による一般の報告(0.15%~0.2%)よりもかなり高率であった。10例がm癌、1例が進